

JNMM2009 年秋号部分和訳

(翻訳：岩永 雅之)

50 Years of INMM

INMMの最初の25年

James Lovett

元INMM 会長 1971-1972

名誉会員

JNMM 春季号には、INMM 後半 25 年につきイボンヌフェリスの優れた記事が含まれた。イボンヌの記事は、私が始めて INMM に加わり、1972 年にウィーンに移ったあとから、始まっているが、それまでの最初の 25 年の私の記憶を付け加えるのをお許し頂きたい。

私の昨年の記事（「計量管理：その創成期」）では、核物質管理が資産管理として当初どのように見なされ、まず最初にどのように管理の問題とみなされたか、原子力委員会所有、政府所有、さらに契約者運転（GOCO）の施設の運転者には、核物質計量管理の測定システムを確立するのに何が要求されたか、そして 1955 年改訂原子力法により固定価格契約者がどのようにシステムに取り込まれたかを論説した。

AEC の核物質管理システムの一部として、GOCO 契約者は、核物質管理要件実施と核物質移動文書署名の責任を持つ代表説明責任者 1 名を指名するよう要求された。AEC は、相互の具体的な計量管理問題を議論するため、AEC-契約者間の計量管理会合を年一度召集した。当初は、これらの会議はほとんど、AEC が取り仕切っていたが（我々は、どのように取り組むか議論し、合意する必要がある……としたが）、徐々に技術的な論文が付け加えられ、通常 2 日の会議は、技術的小会合となっていった。

1955 年以後、固定価格契約者にも、代表説明責任者がおり、AEC-契約者会議に招待されたが、2 つのグループは異なる種類の問題を持っていた。1958 年までに増大した多くの人々の間に、独立した専門の学会が必要との主張が出てきた。その結果、INMM が 1958 年に設立され、その初の年次総会が 1959 年に開催された。

その初期の年月は、INMM の独自性を見つけだすのに苦労した年であったと、追想する。最初の会合は 2 日間で、そのプログラムは技術論文とパネルディスカッションが混在したものだ。私は現場に居合わせなかったが、参加者は、およそ 50 名内外と思っている。第 2 回目会合は、よりよかったものの、出席者はまだ 100 名未満だった。しかし、3-4 年後には、INMM は会議を 3 日間に拡大し、通常、4 日目には、AEC がその契約者会議を付加するところとなった。1972 年までに、INMM 会員と通例会合出席者数は、200 名以上に増大した。（もちろん、すべてのメンバーがすべての会議に出席するというわけではなかった、しかし、非会員出席者と会員非出席者は、ほぼ均衡した。会員数は参加者数を占う良い指数であった。）

組織がホテル側に X 名が会合に参加し宿泊すると約束すると、ホテルは会長専用のスイートを含む一定数の無料部屋を提供してくれる。会長が会合前日夕方にそのスイートで（INMM 出費で）レセプションを主催するのが慣例となった。最初は、この催しはこじんまりしたもので、理事会理事、理事会議長、そしてその 2、3 名の選ばれた個人的友人を加えた程度であった。しかし、参加者は決して制限されてはおらず、長年の間に、大方の「常連」が参加するのが通例となった。

2-3 年後には、レセプションに続き、2 日目夕刻晩餐会が組まれたが、演出は、表彰に替わり著名者スピーチとなった。これには一度ならず米国議会議員を当てることができた。その他に求めたスピーカーは、原子力産業会の主力会社社長であった。1960 年代は原子力が熱気に満ちた年月であった。1960 年代後半には、産業界は競争し始めたが、1976 年にカーター大統領が瀕死の打撃を加え、それから今日、回復し始めるまで（スピーチ）はなかった。

本当に良い話者は、原子力を宣伝するフォーラムを探しており、たとえ話者が「釈迦に説法」

的であったとしても、INMMはその良いフォーラムであった。

この頃、INMMは厳正なボランティア組織であった。誰かが、あるいは時には複数の者が、彼らの地元都市での学会会合を提案し、事業会議で売り込みをした。その都市を選ぶことは、その者がその地域準備を担当することを意味した。副議長（後に副会長となった）は技術プログラムを担当していたが、議長は、基調講演から晩餐会スピーチ、さらには全体調整と諸々を担当していた。それで、現在のように、副会長は2年後には多かれ少なかれ自動的に会長になるところとなった。理事会（EC）は年四回開かれたが、しかし、出席は全体で、18〜20名というところだった。議論はオープンで、理事会と各種委員会議長の区別は投票が求められる時のみ関連した。

1968年までの副会長のときには、皆、INMMに必要なすべてをこなすために本職から時間を割くことは難しくなっていた。米国原子力学会（ANS）はANSの一部となるよう繰り返し示唆したが、しかし、我々は、それは助けにはならず、また多くの点で逆効果であるとの同意を繰り返し得た。

私のその時の答えは、「より多くの人を」であり、そして、様々な奉仕者には「私の頼みを全て独りでやろうとするな、委員会を動かせ」と具体的に話したと記憶している。しかし、それでさえ、元会長（1971-1972）で名誉会員ジェームスロベットによる“INMMの最初の25年”の限界だった。（2年で会長となることを認識した上で）副会長となることへの同意に先立ち、私は、以前に働いたことのあるレスウェーバーとザル・シャピロ両者と連絡をとったことを思い起こし、とりわけラスヴェガス会議（確か第10回）のための現地準備の担当が独りで仕事をするにはあまりに心細いと述べた際、我々二人は会合準備のためヴェガスへ予定外の旅をするところとなったが、彼らの支援に感謝する。

ニューズレターは初期年代につけ加えられたが、しかし、それは誰が会長であったか、そして、誰がニューズレター編集委員会をとりしきるかにより、その品質は変わった。私は、JNMMを自分の手柄とはしない。しかし、去ったあとのことになるが、その後のニューズレターは不十分だと論じたのは私の手柄である。私の論点は単純だった。大部分の会社は、あなたがメンバーであろうがなかろうが会合出席者には経費を支払う。それゆえに、なぜ参加するのか？それに対する私の答えは、人々にとり、技術的なジャーナルがなければならず、ぼやけたあいまいな感覚以外の、会員になることで得られる何かが必要ではないということであった。

私には、多くの思い出がある。ロイカードウェルがGatlinburgでの会合開催を売り込んだとき、彼はテネシー州では、酒法の地方特例を付加し郡内の特定の禁酒都市に対しアルコール許可の投票を独立に実施することを許可した、と報告し、私は彼を疑う何の理由も持ち合わせてはいないのだが、Gatlinburgはその資格を得たテネシー州の唯一の都市だと紹介した。

ラスヴェガス会議の大会マネージャーは非常に一生懸命午前10時以前には技術セッションを開催せぬよう説いた。同時に彼は、ホテルのショーと晩餐会、そこでのスピーチがかち合うようなスケジュールとせぬよう説得に努めた。会合後、彼は我々がユニークな存在だと認めざるを得なかった。午前8時の技術的なセッションとINMM晩餐会とも出席は良好で、そして、彼のスタッフは我々がギャンブルもし、ホテルショーにも出席していたと報告した。明らかに、我々は眠らなかったのだから、彼は我々がなぜ部屋を借りたのか、わからなかった。

ウェストパームビーチでは、家内と私は作動しないベッドルームエアコンに出くわした。（スイートの応接部分のエアコンは、快調だった。）それを修理しようとした後で、ホテルは我々をより小さなスイートの方へ移動させた。移動を奨められた電話の会話の向こうに、多勢のクスクス笑いがあった。後で、それは、マネージャーが“ベッドルーム問題がおありだとのことですが”と電話の会話を始めたからだだと判明した。私には、偶然ながら意味深長になることに気がつかなかった。

それ（25年）は未開の道のりだった、そして、どの一刻一刻も楽しみであった。

備考；

この論文は、*Material Accountancy*の起源、変遷、様々な課題局面など、歴史的経緯を追想したものであることから、著者の趣意を思料し、仮訳にあたっては、今日、一般的に用いられる「計量管理」的用語を避け、時代局面に合わせた邦訳用語を独断的に用いている。例) *Material Balance*

Accountancy : 物質収支会計など